



道程

西東京市立ひばりが丘中学校

第3学年

第18号

令和7年6月19日発行

6月18日の道徳は、生徒会の提案で「いじめ」について学習しました。ピンクのシャツを着ていてイジメにあっていた人を見て、自分たちもピンクの服を着ていこうと行動し、学校全体がピンクの服でいっぱいになるという、カナダで実際にあった話です。小さな行動が世界に広がりました。全校生徒に対して生徒会長の豊久理央さんが説明をしてくれました。「いじめられている人に寄り添いたい」とか「周囲に相談をして、どうにかやめさせたい」とか「いじめられている人を助けたい」などたくさんの意見が出て、「いじめ」について考えるよい機会になりました。

今回はD組の運動会の作文を紹介します。



「最後で最高の運動会」

D組

今回で中学校生活最後の運動会。三年生はすべてに“最後”がつくから嫌だ。でも今回の運動会は最後にふさわしい思い出に残るようなことがたくさんあった。そのエピソードを語ろうと思う。

まずは大ムカデ。大ムカデは本当にたくさんの出来事があった。D組は最初から上手い方で一位もとっていた。正直今年こそは優勝できると思っていた。ちなみに1回も優勝したことがない。ただここからがすごいことになってしまった。転ぶ回数も増え足も左右バラバラ。何か言っても完璧には治らず、逆に面白ささえ感じた。当日もいい順位は取れなかったけど、逆に思い出に残った。

選抜や全員リレーはすべてが惜しかった。どちらともアンカーでギリギリ抜かせず、悔しかった。でも競り合いをしたり、見られたりしたのでとてもワクワクした。いけるいけると応援するのがとても楽しかった。これもいい思い出だ。

ソーラン節は一週間前までは全てがバラバラで、このままで大丈夫かな？と思ったりした。でも本番ではみんな完璧すぎてビックリした。自分が踊りながらもわかるぐらい、変わっていた。今思えば体操もひばりランニングもいつもより声が出ていたし、最初よりか声も揃っていた。体育行事委員長としてしっかりやれたことは少ないかもしれないけど、周りも支えてくれたおかげで無事最高の運動会にできた。みんなには感謝しかない。

「自ら行動する」

D組

今思えば短いようで長い運動会期間だったと感じている今日この頃。ソーラン節の練習も含めると約三か月間、私たちは練習に打ち込んできたと思うと大層な事と思えてくる。

中学校生活では3回目で、最後の運動会だったこともあり、「慣れ」と「わくわくによる微妙な緊張感」の相反する感情に包まれて私は練習に臨んでいた。

運動会当日が近づいてきていたある日のソーラン節練習。その日は踊りの完成度を高めるための練習だった。踊りが終わると、『去年の3年のこの時期の完成度と比べると、当日大丈夫なの？去年の3年生の先輩たちの踊りは、この時期でも感動するくらいだった。』と言われてしまった。正直私は、「周りが声出してないからやりにくい」「私はやることはできているし、悪くない、悪くしている要因ではない」と思っていた。

ある日の練習でよく声を出している人の隣になったことがあった。初めはその人の隣であまり声を出せずに踊っていたが、途中から「なんか今の私、ダサくない？」という気持ちが芽生え始めてきた。そのとき私の抱いていた想いは、一番、ソーラン節をダメにしている要因だと気づいた。私もかつての自分のように、自ら声を出せば周りもそれに感化されて協力してくれることを願ってソーラン節に挑むようになった。それから、踊りの切れも上がり、次第に全体の完成度も上がっていくような気がした。

運動会をとおして自ら動くことを恐れず、受け身にならないように残りの中学校生活を過ごしていきたいと思えた。

「夢じゃないあれもこれも」

D組

玄関。そのドアを開けると、1週間ぶりに吸う空気はとても久しぶりのような気がした。彼は一週間、体調不良だったのだ。一週間、本当に alone だった。今回の運動会で、ここに書き記したいことは二つだ。

一つはゴールを決めないこと。僕はゴールを決めると自分の中で限界をつくってしまう。僕は、なるべくゴールは作らず、「貴方は先の方、まだ先の方」と心がけて、今は Try することだけを考えるようにしている。運動会練習、僕はあまり参加できなかったこともあったけど、きっとゴールはここじゃないと肝に銘じ続けていたんだと思う。

迎えた運動会、泥の風と汗の煙。リレーで走るクラスメイト一人ひとりのその姿に希望を託し、僕らは思わず叫んでいた。

「いったれー！！」

もう一つは、一生懸命に取り組むことの大切さ。中学生特有のかっこつけた雰囲気。僕は、そんなのは要らない、捨ててしまおうべきだと思う。全力で壁にぶち当たってあげばいい。僕のクラスは、全員で壁にぶち当たっていった。

今回の運動会、とにかく楽しめた。ソーラン、リレー、ムカデ、すべてが僕の財産。痛みを知るまなざしは深く澄んでもう萎れることはない。またこのメンバーで二十年後、運動会をやりたいと思った。